
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第27号 2020年3月

社会で活躍できる「実践力」育成のために必要な取り組み

Measures Needed to be Taken to Develop “Practical Ability” for Being Active in Society

小島 洋 | KOJIMA Hiroshi

社会で活躍できる「実践力」育成のために必要な取り組み

Measures Needed to be Taken to Develop “Practical Ability” for Being Active in Society

小島 洋 | KOJIMA Hiroshi

What society demands from students are independence, action, and the ability to set and solve problems; however, there is no correlation between these traits, i.e. “practical ability” and students’ academic ranking up through senior high school. According to the results of research carried out by university students, the main factor supporting “practical ability” is “independent action awareness”.

As for the factors for creating "independent action awareness", it was revealed that having a leadership role was greatly related. In other words, it is thought that providing leadership authority depending on an individual's role – namely, the offer of an opportunity to think and practice independently -- is related to developing “practical ability”. Universities in the future will be required play the role of cooperating with local communities to provide a “place to practice”, and at the same time work to both revitalize local communities and to develop human resources with practical ability.

Keywords:

実践力、リーダー職、人材育成、地域社会、大学
practical ability, leadership role, human resources, local community, university

1. 検証課題の背景と設定

社会で活躍する人材育成のために大学に求められる役割と課題

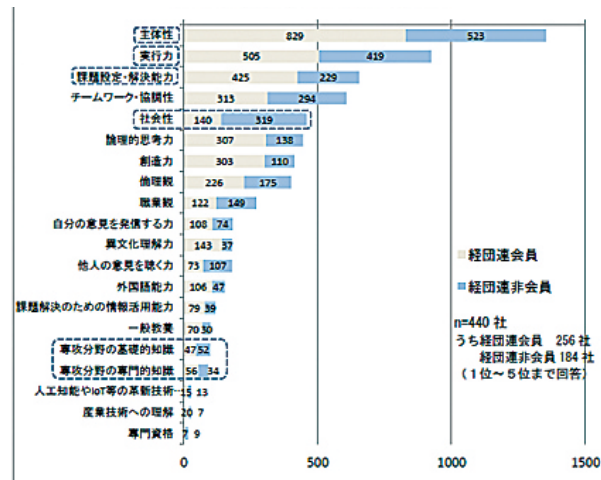
(1) 社会が求める高等教育のあり方

大学生における高等教育のあり方を検討する上で、文部科学省や大学側の視点を起点とするのではなく、企業側である社会の視点を起点として検証を始めた다고考える。

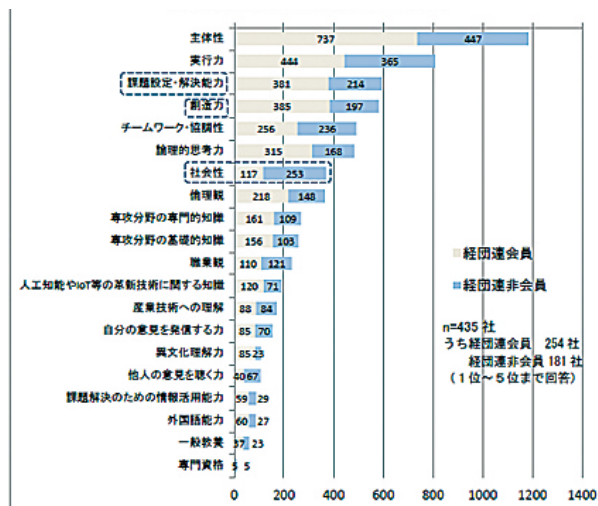
それは、社会で活躍するための大学教育と捉え、その先にある活躍の場のための教育として考え、課題設定をした다고考える。

日本経済団体連合会(経団連)は2018年4月17日、「高等教育に関するアンケート結果」を公表。企業が学生に求める資質・能力などは、文系・理系学生ともに「主体性」「実行力」「課題設定・解決能力」が上位となった。【図1、図2】

【図1】学生に求める資質、能力、知識(文系)



【図2】学生に求める資質、能力、知識（理系）



もちろん、経団連が求める課題がすべての職場に適用されるわけではないという前提にはたつが、社会がこれからの人材に求める要件としては、重要な指標と考えらえる。文系・理系ともに、上位に挙げられた「主体性」「実行力」「課題設定・解決能力」と現状の大学での教育との関係などを検証したいと考える。

(2) 東北芸術工科大学のあり方

山形市内の山形駅からバスで約20分の低位段丘面に位置する芸術系の大学。文系、理系にも属さない芸術系ではあるものの、芸術学部とデザイン工学があり、文系的な要素の強い「文芸学科」から「建築・環境デザイン科」等に代表される理系的な学科まで幅広い学科が存在している。一部、入試試験ではセンター試験を利用した入試方法もあるものの、偏差値では図ることのできない学生を育成するという視点から小論文や面接などを重視した入試試験が多く設定されている。結果的に高校の偏差値では幅広い学生が入学しており、従来の偏差値では図ることのできない正解のない課題に学生時代から取り組んでいる。とはいえ、一般的なデータでは、東北芸術工科大学の偏差値は、40.0～47.5【偏差値データ1】となっている。

(3) 検証対象学生とカリキュラム

今回検証対象とする学生は、東北芸術工科大学 デザイン工学部 企画構想学科に所属する2年生である。この2

年生の前期日程のカリキュラムにおいて、私が担当する「プロモーションディレクション実践(1コマ)」と「プロモーションディレクション演習(2コマ)」の2つのカリキュラムで得られたデータを元に検証する。この授業は、山形市の中心地である七日町で音楽文化イベント「オトナルヤマガタ」を企画運営する授業である。ここでオトナルヤマガタについて説明させていただく。オトナルヤマガタとは、東北芸術工科大学が主催する街中音楽文化イベントである。2016年より開催されているイベントであり、東北芸術工科大学 企画構想学科の学生が、取り組んでいるイベントである。山形の中心である七日町を音楽やその他イベントを開催することで、地域の活性化に貢献することを目的として実施している。同時に学生にとっては、イベントを通じて、「実践力」を養うことを目的としており、地域貢献しながら、学ぶ産学連携イベントである。山形市からはこのイベント趣旨に賛同を頂いているため、2017年より後援という形で大きな支援を頂いている。この授業の評価方式は、大きく3つの項目で評価している。

①参加性=どれだけ準備の過程に参加したか

- ・与えられた役割に対して、参加をし、活動をしたかを評価
- ・授業への参加（出席）及び授業外での活動（学外活動含む）をレポート形式で報告いただき、その活動量を参加性として定量的に評価

②記述力=自分が取り組んだことをレポートに記述する力及びそこで考えた課題を記述する力

- ・与えられた役割に対する過程と成果を記述式でアウトプットし、そのアウトプットによって、どれだけ実践的に動けたかを評価
- ・また、それらの過程における工夫や取り組みについてもアウトプットすることで、考えながら動いたかということの評価

※レポート評価の結果より、文章力を評価しているのではなく、個々の活動をより具体的にアウトプットする力と説明力を評価している

③積極性=与えられた課題だけでなく、どれだけ主体的に取り組むことができたのか

- ・周辺環境や相手との関係の中で、成果につながらなかったとしても、自らが課題を発見し、その課題に対して取り組みをしたかと評価
- ・レポートによるアウトプットだけでなく、全学生による多面評価をすることで、授業外の活動も定量的に

評価

※具体的な評価項目は、「オトナルヤマガタについて、深く関わり、自ら課題を発見し取り組んだ人」を8名（1位の1名+7名）選出していただいている

上記3項目を2教科の授業評価の合計値=実践力として定量化している。

点数分布:80.3~33.5 平均点:57.1

そのうえで、実践力の数値と学生の出身高校の偏差値、その他、意識や具体的な行動との関係を明らかにすることで、社会で活躍できる人材の要件である「実践力」に必要な要素を明らかにし、これからの社会で活躍できる人材育成のため指針を明らかにしたいと考える。

検証課題は、以下の3つの設定する

- (1)「実践力」と学力の関係
- (2)「実践力」の高さの要因
- (3)「実践力」の育成課題

2. 検証課題と検証結果

(1) 「実践力」と学力の関係

「実践力」については、2つの授業の成績をA評価(各5名)=4点、B評価(各13名)、C評価(各33名)の分布において、2つの授業の成績(GPA)の和とその他の項目との関係を検証する。2つの授業の評価点(GPAの和)の分布は以下である。

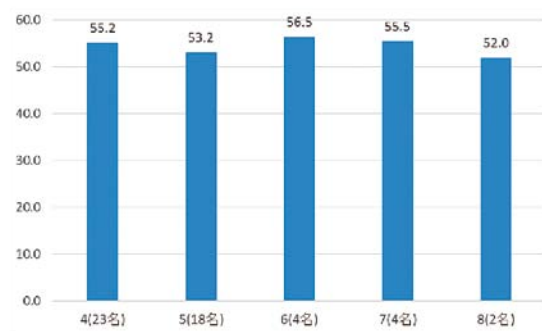
- 8点=2名:3.9%
- 7点=4名:7.8%
- 6点=4名:7.8%
- 5点=18名:35.2%
- 4点=23名:45.0%

→数値が高い=実践力が高い

高校の偏差値については、それぞれの学生が入学した当時とは異なるものの、大きな差はないという前提にたち、現在の高校の偏差値データで検証している。データについては、株式会社 イトクロ「みんなの学校情報」の偏差値データを引用している。

【実践力の評価と高校の偏差値の関係】

<グラフ1>



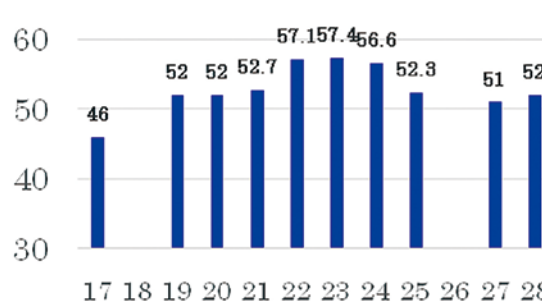
縦軸:出身高校の偏差値
横軸:「実践力」評価のスコア

上記の実践力と高校の偏差値の関係では、多少の差はあるものの、平均値54.4に対して、前後5%以内の誤差におさまっており、実践力と高校の偏差値に相関関係がないことが証明された。また、特記すべきは、最も高校の偏差値が低いスコア(8点)の実践力が高いということである。このことにより、高校までで学ぶ学力と社会で活躍できる「実践力」とは相関関係がないことを明らかにされた。

ただし、レポート記述力については、一定の相関関係があることが明らかになった。レポートを記述する力=文章をアウトプットする力については、レポート記述力の評価において、中間層において、高校の偏差値が高くなる傾向があり、基本的な学力と記述力については、一定の相関関係があると考えられる。

【記述力の評価と高校の偏差値の関係】

<グラフ2>



軸:出身高校の偏差値
横軸:レポート評価のスコア

結論:「実践力」と学力の相関関係はない。ただし、レポート記述力については、一定の関係があり中間層のスコアが高くなる。

(2) 「実践力」の高さの要因

「実践力」とその高さの要因を分析するために、対象学生を3つのグループに分ける。

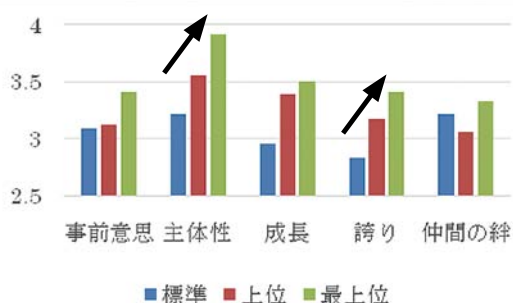
実践力最上位群:スコア6-8点の10名

実践力上位群:スコア5点の18名

実践力標準群:スコア4点の23名

【意識と実践力群の関係】

<グラフ3>



意識における評価手法

イベント終了後参加した全学生に対してアンケート調査を実施

事前意思:イベントの前への取り組み意識

主体性:主体的に取り組んだか

成長:イベントを通じて成長できたか

誇り:イベントを通じて誇りを持てたか

仲間との絆:仲間との絆が深まったか

上記項目について5段階で評価し、プラス評価の2項目の和と「実践力」の結果との相関関係を<グラフ3>にしている。

※スコアが高い方が強い関連性がある

グラフの結果から、特に差が大きかったのは、「主体性」=積極的に関わることができたかの意識である。事前に持っていた意識よりも、その場において、取り組む意識を持って取り組んだ学生において、高い実践力の評価が観られた。すなわち、能力ではなく、主体性を持って取り組むことができたかという1点が実践力をわける差別化要因であると考えられ、同時にそのことが「誇り」=東北芸術工科大学

の学生としての誇りも持ち合わせることができたと考えられる。また「成長」=結果的に自分が成長できたかという指標も相関関係があることから、「主体的な取り組み」×「自身の誇り」=「自身の成長」という方程式が成立していると考えられる。

結論:「主体的な取り組み意識」が取り組み機会を創造し、実践力の高さにつながっている。

(3) 「実践力」の育成課題

最後に、「実践力」を育成していくための課題が何で、どんな取り組みをするべきかについて検証する。

前提として、「実践力」を正しく評価することは、正解がなく数値化しにくい。また、コミュニケーション能力やチーム力などに様々な関係や環境要因に影響されるため、正しく評価するということは極めて難しい課題である。

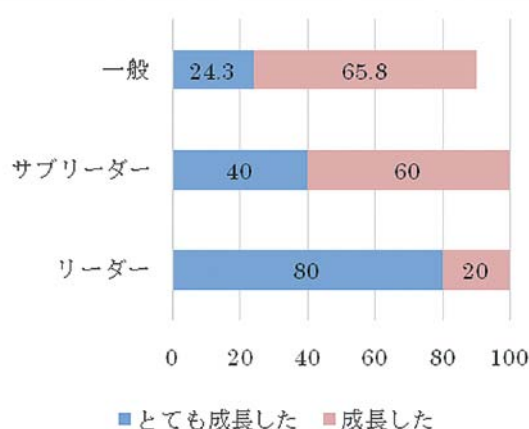
また、個々の学生の事前に持ち合わせているスキルが異なるため、個々の成長による「実践力」の伸長と相対的な集団の中における相対評価における「実践力」の評価があることも注意が必要である。

「実践力」の高さが「主体的な取り組み意識」と高い相関関係があるということは、「主体的な取り組み意識」をどのような創造していくかが、「実践力」の高さに直結する課題であると考えられる。すなわち、「意識」開発をするための具体的な施策は何かを論じたい。

対象学生のアンケートより、与えられた役割によって成長度合いに差が見られた。

【役割と成長度の関係】

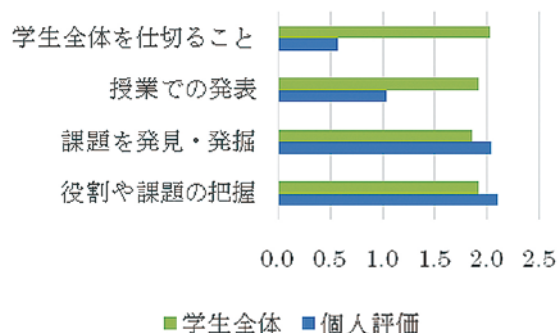
<グラフ4>



授業を通じた取り組みでは、5つのチームにわけて運営し、51名の中から、リーダーを5名、サブリーダーを5名、選出している。リーダー・サブリーダーの選出については、無記名の投票で実施し、選ばれた人は基本的にリーダー職を全うしていただいている。リーダー（5名）、サブリーダー（5名）、一般（41名）の授業後の成長度をアンケートで検証すると、リーダーの成長度が高くなり、サブリーダー、一般と続いている。これは「役割」が人を育てるということの証明である。リーダーであれば、主体的に考えざるをえない場面が多く、主体性に考えるがゆえに、学習機会も多く創出され、成長につながっていると考えられる。

【学生全体と個人の成長・変化の比較】

<グラフ5>



また学生の成長・変化について、個人の変化と学生全体の変化の比較の中で、相対的に、個人の成長が大きかったものと、小さかったもの上位2項目を列挙している。

学生全体の成長に対して、
個人の成長が高かったもの

「役割や課題の把握」「課題を発見・発掘」この2項目の結果より、個人個人では、与えられた役割を把握し、それぞれ課題を発見・発掘できていることが証明されている。

学生全体の成長に対して、
個人の成長が低かったもの

「学生全体を仕切ること」「授業での発表」この2項目は、リーダーやサブリーダーを中心した役割であったことから、全体と個人の差が出たと考えられる。すなわち、役割に関連した機会の有無が「実践力」の成長に関連していると考えられる。

人材開発・組織開発の中原淳氏は、著書「職場学習論」

の中で『人間は、優れた仕事をするためには、自分ひとりではやるよりも、他人の助けを借りるほうが良いものと悟ったとき、その人は偉大なる成長をとげる』とし、本カリキュラムにおけるリーダー及びサブリーダーがその役割を担っていると考えられる。すなわち、他人の助けを借りて協業しなくてはならない役割が実践力の成長を支える要因と考えられる。そのような学生アンケートなどから、今後同じ学生集団に「実践力」の成長の機会を設けるのであれば、今まで経験したことのない役割を提供する。すなわち、リーダーやサブリーダーの未経験者にリーダー職を提供することで、役割の均一化が図られ、成長機会も均等に提供されることが考えられる。円滑な実施という面では、リーダー経験者が再度リーダーを実施したほうが円滑に実施されることが考えられるが、教育的な視点で考えるのであれば、できるだけ多くの学生にリーダー職を提供することで、主体的に考えて行動する機会創出をしていくことが、「実践力」の向上につながると考えられる。

結論:リーダーの役割によって、主体的に考え、他者の助けを借りて協業する役割と機会が創出され、その機会が「実践力」の成長につながる。できるだけ役割ごとのリーダー職を設定し、機会を提供することが「実践力」の育成につながる。

3. 結び

社会で活躍する人材育成のためのこれからの大学教育の在り方

「実践力」の育成のためには、できるだけ現実的な「実践」の場を提供し、その中で、できるだけ多くの役割が体験できる機会を創出することが重要であると考えられる。さらにその役割の中では、「リーダー職」を提供することが、主体的に考える機会を創造し、意識の向上から実践力の発揮につながると考えられる。そのために、これからの大学教育の求められる役割は、「実践」の場を提供するために地域社会と結びつきを深め、地域社会の課題に対して「実践」的に取り組みつつ「実践力」を育成していくことが重要と考えられる。「実践」の場における教育機会を通じて、人材を育成し、地域社会に貢献することが、社会におけるこ

れからの大学に求められる役割になることであり、そのために我々大学側から積極的に地域社会に働きかけ、地域との結びつきの中から社会課題への対応を通して、学生の「実践力」の育成につなげていくことが必要であると考えている。これからの大学に求められる役割は、地域社会と連携し「実践の場」を提供しつつ、地域社会の活性化と実践的な人材育成の両面への役割を果たしていくことが重要になると考えられる。

引用

「高等教育に関するアンケート結果」日本経済団体連合会 2018年4月

偏差値データ出典

株式会社 イトクロ「みんなの学校情報」

参考文献1)

「職場学習論—仕事の学びを科学する」

中原淳著 東京大学出版会2010年11月